

短小ビフォー・アフター！ 租チンモデルの美味しい仕事



玉子王子 著

1章 モデルは個性が必要

Tはモデルである。

モデルは皆似たような綺麗な顔の人間ばかりだ。

しかし美少女キャラが一人一人違うように、モデルにも個性が必要だ。

先行する誰かとかなり似ていると、著しく不利である。

かなり有名なモデルとなら、まだましだ。

スーパーモデルと似ているからと言って混同されることはないだろう。

問題はそこそこの一流どころと似ている場合だ。

これは活躍の場が半端に被ったりして、大いに不利となる。

Tの仲間でも、活躍しだした一流どころと顔が似ているので顔を出さないタイプのモデルに転身したものが結構いた。

今、彼らの気持ちがわかってきた。

オーディション。

とあるビルの一室、外から見えない会議室のような部屋。

女性ばかりが十人ほど長い机に並んで座っている。

前に十人、モデルが座っている。

Tもその一人だ。

下着の会社のオーディションだからか、モデルもほとんど女性ばかり。

一人だけ、男もいる。

Sという名で、まるで、鏡を見るようだった。

Tとほとんど同じ顔で、体型も双子のようだった。

いや、モデルだから体型は似ていて当然か。背が同じぐらいということだ。

相手も驚いていた。

しかし、オーディションが進んでいくと、相手の困惑は消えた。

歩いて見せたり、何かアピールして喋ったりするうちに、どう考えてもTより相手の方が使えそうだとわかってきたためだ。

今、最後の面接に呼び出されている。

十人ほどモデルが並んで座っていて、TとそっくりさんのSが真ん中あたりに座っている。

審査員はしきりにSに話しかけるが、もうあまりTには話しかけてこない。

そもそも似たような顔の二人を同時に採用することはありえないのだ。

なら、使えそうなほうだけ取るのは当然。

ため息が出る。

ため息などついているから採用されない気もするが、つかずにはいられない。

最近仕事がほとんどなく、そろそろ事務所に契約更新できないかもしれないと言われている。

今日が最後のチャンス、というような気配も感じられた。

何とかがんばって、と思ったが、その熱意はアピールで空回りしてしまった。

別にしないでも、Sを上回れたかはわからない。

「それじゃ、最後に……」

真剣そうな顔をずっとしていた審査員の女性たち。

三十にならないかもしれない、若い女性ばかりだ。

皆、こういう業界にいるからかわりと美人ばかりである。

思えば、モデルたちも皆当然のように美人だ。

そういう美女ばかりの業界とも、そろそろお別れか、と思う。

「下着のモデルですから、お二人に下着姿を見せてもらいましょうか」

思わず、Sと顔を見合す。

「それは……おかしいのではないでしょうか」

S。

大人しくしていれば採用されるだろう状況であることはわかっているはずだ。

なのに、あえて理不尽に立ち向かう。

いい男だ。

顔が**最高**にいいだけの事はある。

まあ、良すぎてTの邪魔になっているのだが。

「そうです、Sさんの言うとおりの。これはセク」

バッ、と手を突き出して制する女性。勢いが強すぎ、ブルンと、そこそこの巨乳でしかない乳房が揺れる。

思わず目を取られる。

そういうところも、仕事が無い理由の一つかもしれない。

「滅多なことを言うもんじゃないわよ。吐いた唾は飲めないという言葉もあるわ」

セクハラ、といわれたくないということか。

だが、ほかに表現しようもない。

「わかったら、さあ、審査続けるわよ」

「でも……」

「そう、それじゃ二人とも不採用でいいのね？」

——セクハラ+パワハラじゃん。最悪だなこいつら。

周りは、関係ないモデルに下着会社の女性たち。

二十人近い女性がいる。

その前で下着姿になれなど酷い話だ。

モデルは人前で着替えることもあるが、それは仕事のためのこと。

普段から半裸になって平気というわけではない、当然だろう。

「審査に応じられないなら、非協力的だったって事務所のほうに言ってもいいのよ？」

それは困る。

元々、そろそろクビかも知れないのだ。

SがチラリとTを見てくる。

そして、上着を脱ぐ。

仕方なくTも脱いだ。

二人とも、脱いでも似たような体だ。

「まあ、引き締まったいい体ね」

「でも、本当に脱いじゃうなんて……脱ぎたかったんじゃないの？」

頭に血が上る。

無理矢理脱がせておいてそれか。

「さ、下もよ。っていうか、下着、まだ見えてないじゃない」

「嫌ならいいのよ、事務所に言っちゃっても」

周りのモデルを見る。

おなじ仲間だ。

だが、皆好奇の視線を向けてくるだけだった。

所詮他人だ。

「あら、周りが助けてくれるかもって？ 中々無いんじゃないの？ だって普通、こういうセ……キツイ審査受けるのって、女の方じゃない？ 皆そこそこに苦労してきてるのよ、男のせいでね」

「それは俺たちには……」

関係ないが、そんな正論が通る相手とは思えない。

ズボンを脱ぐ。

「あらあ、結構二人とも、モッコリ立派ねえ」

「ああ、結構二人とも、**モッコリ立派ねえ**」

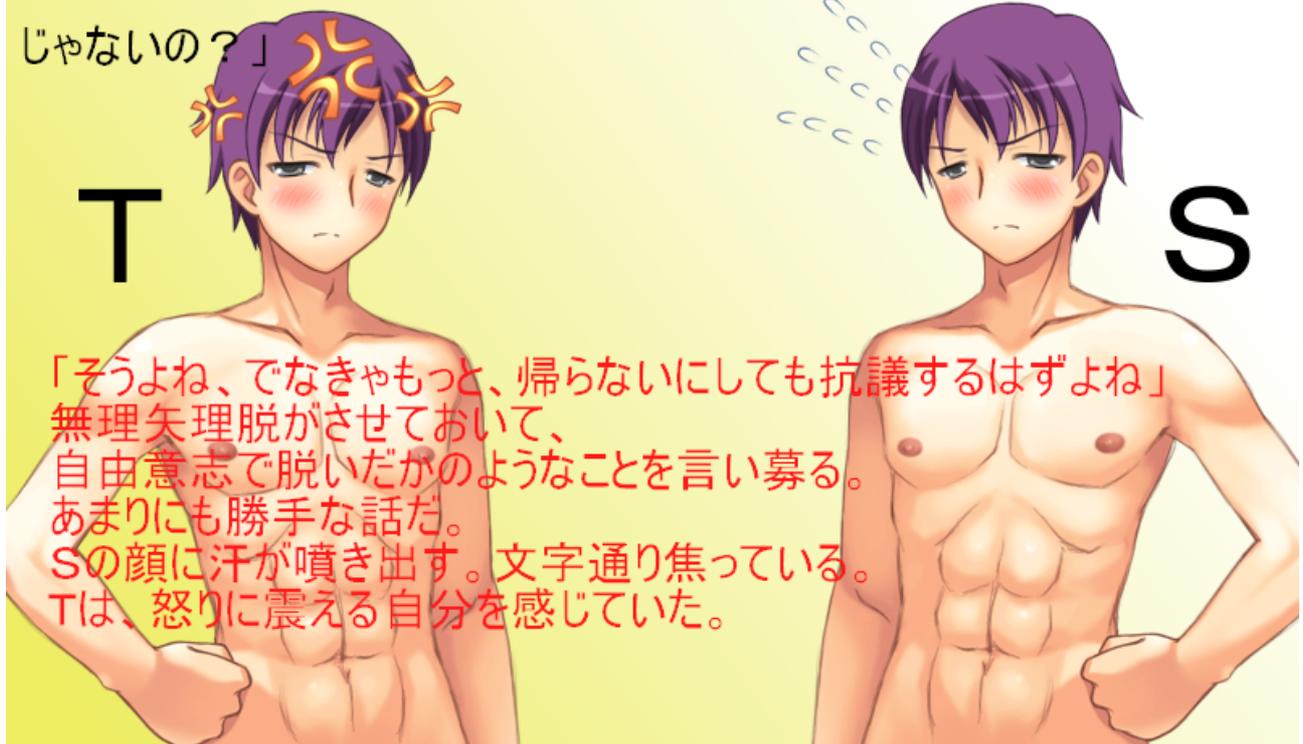
「二人そろって、下も似た感じ？」

「そういう顔の人って、大きいのかしら」

「でも、本当にパンツ姿になっちゃうなんて……やっぱり鍛えた体と、

立派な物、女に見られたいん

じゃないの？」



「二人そろって、下も似た感じ？」

「そういう顔の人って、大きいのかしら」

「でも、本当にパンツ姿になっちゃうなんて……やっぱり鍛えた体と、立派な物、女に見られたいんじゃないの？」

「そうよね、でなきゃもっと、帰らないにしても抗議するはずよね」

無理矢理脱がさせておいて、自由意志で脱いだかのようなことを言い募る。

あまりにも勝手な話だ。

Sの顔に汗が噴き出す。文字通り焦っている。

Tは、怒りに震える自分を感じていた。

「すいません、俺はもう」

「あら、いいの？ ここから帰って。事務所どうなるかしら」

「どの道、俺は不採用だろうし」

「そりゃ、顔がそっくりだモンね。二人もおなじ人はいらないわ。体もそっくりだし、二人採用して、何か使い道があるならまだしも」

そんな都合のいいものがあるわけが無い。

「でも、ここで帰すわけにはいかないわ。最後までやらなきゃ、ねえ、つまらないもん」

会社の十人の中の、真ん中あたりの女。

周りの反応から、社長なのかもしれないと思う。

「ね、皆さん、協力してくださらない？」

モデルたちに、語りかけていた。

「審査に協力的な方には、こちらの心証もよくなるわよ？」

流石に少し顔色が変わる女性モデルたち。

だが、立ち上がる。

モデルは選ばれた人間だ。

だが、需要より供給が勝っていることは確か。

競争は激しいのだ。

「ごめんね、Tさん、Sさん」

「大丈夫よね、かなりモッコリしてるし」

「っていうか、パンツ姿になるぐらいなんだから、見せたい気持ちもあるんでしょ？　こんな美人の中で、全部脱げたらって……」

そんなことを考えるわけも無い。

が、何か言う前に回りに美女が群がる。

一人二人ならまだしも、一人に五人ずつでは跳ね除けようが無い。

怪我をさせていいならまだしもだ。

腕を捕まれ、パンツに手が伸びる。

「ま、まって」

「うわっ！」

「あ！　Sさんの大きい！」

「あ、本当だ！　ブラブラしてる！」

「やだ、ちょっとビクッとしなかった？」

「喜んでるんじゃないの？」

「審査したいわ」

「あ、それじゃ」

「まあっ！　ご立派ねえ！　ハーフでも何でも、小さい人は小さいのに……」

「日本人は小さいなんて何の根拠も無いですよ」

「そうそう、あれって昔何の測定してるか意味がわからない人が、縮んだ状態のを届けたせいで低くなった数字が広まっただけらしいですよ」

「なるほど、そういえば日本人って本当に小さいのね、なんて思ったこと無いわ。Sさんの大きいしね！　Tさんも！」

「そうそう、Tさんのデカチ〇を見せてもらいましょうよ！」

「Sさんとどっちが大きいかな」

Sの巨根騒ぎで、Tのパンツが取られるのが遅れた。

ため息をつくT。

仕方ない女たちだ。

そんなに巨根が好きなのか。

Tも自慢ではないが、モデル仲間の中で大きさに劣等感など感じたことはない。

Sもそうなのだろう。

なら、こっちもきっと同じぐらいだ。

「じゃ、パンツ取るよ。はい」

「わ！ ごりっ……え」

沸いていた女たち。

モデルだけではなく、会社の間人も興奮してSやTを囲んでいる。

というか、今はほぼTの周りに集まっている形だ。

期待と、情欲というしかない輝きに目を光らせて。

開かれた口から、涎が垂れるのが見えた気がする。

獣に狙われた生肉の気分だ。

巨根は辛い。

と、それが、一瞬で静まり返る。

驚いて声も出ないか。

驚いて声も出ないか。

「うそ、ちっちゃ」

声の主を見る。信じられない。
だが、訂正はない。

「小さいよ！ Tさんのおチンチ○！」

「え、どう」

「Tさんのペニペニくん、超小さいよ！」

「うっそ、信じられない！」

こんな小さいチ○ポあるの！？

「小さい！ 小さすぎる！」

子供みたいよ！」

「っていうか、マジうちの子供と同じぐらいなんですけど！」

「小指かよっていう！」

「皮もごつくて、ドリルチ○ポじゃない！
大人で、こんなの本当にあるんだ！」

沸きあがる女たち。

そうなることはわかっていた。

ただ、方向性がまるっきり逆だったが。

「うそ、ちっちゃ」

声の主を見る。信じられない。

だが、訂正はない。

「小さいよ！ Tさんのおチンチ○！」

「え、どう」

「Tさんのペニペニくん、超小さいよ！」

「うっそ、信じられない！ こんな小さいチ○ポあるの！？」

「小さい！ 小さすぎる！ 子供みたいよ！」

「っていうか、マジうちの子供と同じぐらいなんですけど！」

「小指かよっていう！」

「皮もごつくて、ドリルチ○ポじゃない！ 大人で、こんなの本当にあるんだ！」

沸きあがる女たち。

そうなることはわかっていた。

ただ、方向性がまるっきり逆だったが。

体験版終わり

この後 T は美女たちによる短小言葉責めで
目をそらしてきた真実、
自分が短小であると言う事に無理矢理向き合わされます。

よろしければ、続きは製品版でお楽しみください